

# 特別支援学校(病弱)における 発達障害の二次障害軽減への教育的取組の開発

—認知行動的介入による登校行動形成の試み—

○吉井紀文

(高知県立高知江の口養護学校)

小野智子

(高知県教育委員会事務局特別支援教育課)

寺田信一

(高知大学教育学部門)

KEY WORDS: 病弱教育, 認知行動療法, 不登校支援

## 【問題の所在と目的】

近年、特別支援学校(病弱)に在籍する心身症等の児童生徒の中に、発達障害の二次障害が疑われる事例が増加している。特別支援学校(病弱)に転入学後も、発達障害の二次障害として学習や対人関係への心理的不安が強く、不登校状態が続く事例が少なからずある。このため、特別支援学校(病弱)では、発達障害の二次障害軽減に、心理学的な知見を取り入れた教育的取組の開発が求められている。

本研究では、特別支援学校(病弱)に転入学後も不登校状態にある自閉スペクトラム症(ASD)の女兒Aさんの認知の歪み修正に焦点を当て、登校行動の形成に認知行動療法を取り入れた教育的取組を行った。その成果から、認知行動的介入の効果を検証するとともに、発達障害の二次障害軽減のための教育的取組について検討した。

## 【方 法】

**1) 対象児:** 特別支援学校(病弱)小学部に在籍する ASD の診断を受けている 12 歳の女兒であった。特別支援学校(病弱)には、小児心身症の診断を受け、小学 1 年 2 学期に転入学した。しかし、転入学後も対人関係の不安から断続的に不登校状態が続いた。小学 4 年 2 学期以降は週 1 回から 2 回、2 時間程度の個別指導を行った。

小学 6 年 4 月に 3 日間の別室での個別指導後、不安を主訴に再び不登校状態となった。5 月には明け方 6 時ごろまで眠れない日が出現するなど、睡眠の問題が大きくなった。A さんはこの頃から「死にたい」と保護者に言い、自分の身体を叩く等、自己否定的な言動が目立ち始めた。

**2) 期間・場所:** 研究期間は 20XX 年 5 月から 12 月であった。大きくは 5 月から 6 月までの実態把握期と、7 月から 12 月までの介入期に分かれる。実態把握期は主に家庭訪問を中心に実施し、介入期には週 2 回、特別支援学校(病弱)小学部空き教室にて個別指導を実施した。

**3) 問題の分析と介入方針:** アセスメントとして、保護者と学級担任からの聞き取り調査、行動観察および質問紙調査を行った。質問紙調査では、本人、保護者、教員の 3 者間で比較できる情緒と行動に関する質問紙として、子どもの強さと困難さアンケート(SDQ)と、Achenbach の ASEBA 評価システムを実施した。抑うつには日本語版パウルソン児童用抑うつ性尺度、不安には日本語版スペンス児童用不安尺度と日本語版児童用顕在性不安検査を実施した。さらに、保護者の不安との関連を調べるために、保護者に新版 STAI 状態-特性不安検査を行った。そして、A さんの認知の歪みを把握するために、楠川(2008)作成の質問紙から、認知の歪みに関連する項目を学級担任の評定にて行った。これらのアセスメント結果から、ケース・フォーミュレーション(CF)を行った。CF では、A さんは学習がわからない場面や人との関わりの中で、「やるべきことをしない自分はダメな人間だ」という中核信念が刺激され、自動思考「人から否定的に思われているのではないか」が起り、結果として不登校になっていると考えた。

この CF を基に支援会議を実施し、介入方針を定めた。A さんは「勉強ができていない」という思いが強いことから、「人との関わり」よりも「わからない」を変容させることを優先した。A さんに特徴的な認知の歪みである①べき思考②破局化思考③ラベリングの修正に焦点を当て、多様な選択肢の中から自己選択、自己決定し、段階的に今できる学習から取り組み、「できた」事実を自己評価することで内発的な動機を高め、段階的に登校行動の形成を試みた。

**4) 倫理的配慮:** 指導および研究成果の公表に関して、A さん保護者に口頭および文書で説明し、承諾を得た。

## 【結果と考察】

A さんの認知の歪みの修正を軸に支援した結果、行動の変化が認められた(表 1)。適応的な行動が「できていない」から「できている」に認知を変容させ、睡眠の問題の改善や「死にたい」の発言の消失につながったと推察した。

表 1 認知の歪み修正の支援例と行動の変化

行動	認知	支援方法	CBT技法の要素	具体的支援	行動の変化
学校に行かない	べき思考 ・普通の子は、学校に行き6年生の勉強ができるのに、下の学年の問題もわからない私はバカだ	Aさんが考える「べき思考」に合う理想的な活動から、Aさんの「べき思考」からすると「できた」に入らない活動まで複数の選択肢を提示しAさんに自己決定させる	問題解決療法	漢字の選択数提示と自己選択、自己決定 漢字学習の視覚的構造化 学園祭への参加方法の選択数提示と自己選択、自己決定	・2年から4年までの67字の漢字習得 ・「勝」の漢字の覚え方から説明 ・毎週2回の登校 ・4教科の個別学習 ・担任との一週授業再開
	破局化思考 ・学校に行けていない、自分は生まれてくる価値がないクズだ	目標を明確にし、シートで視覚的に詳細することで「できた」に気づかせる	行動契約法	週目標シートによる自己目標の設定および自己評価	・感情スケールリングの内在化 ・感情と行動の関係への気づき (例:「帰りはいつも『いらいら』が少ない」)
	ラベリング ・いらいらしたままならないな ・感情は自分でコントロールできないものだ	・感情をスケールリングでセルフモニタリングさせることで、二分法的思考ではなく、相対化させる	セルフモニタリング法 行動活性化法	本人の言葉を使った感情スケールの作成し、登下校時に記入 記入数値をグラフ化し、活動と感情を関連付ける	・睡眠問題の改善 ・「死にたくない」と口にする

また、出席日数の割合が増加した(図 1)。さらに、7 月以降の介入期に設定した週 2 日の個別学習日のうち、A さんが欠席したのは 11 月の 1 日のみであったことから、認知行動的介入によって登校行動を形成したと考えた。以上のことから、発達障害の二次障害軽減への教育的取組に、認知行動療法の知見を取り入れることは有用であると考えた。

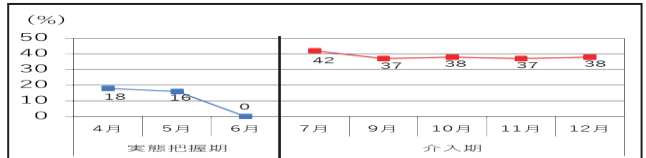


図 1 月別の出席日数の割合

一方で、12月に実施した2回目の質問紙調査の結果からは、認知の歪みの1つ、べき思考のみ改善が認められ、その他の結果に改善は認められなかった。これは対人関係の不安が中学進学不安と重なり、新たに高まったと考えた。

本研究は1事例研究であり、フォローアップ期を設けていないなど限界がある。今後も事例研究を積み重ね、発達障害の二次障害軽減への教育的取組について検討したい。

## 【文献】

楠川未来(2008) 広汎性発達障害生徒の対人トラブルと認知の歪みの関連性. 高知大学大学院教育学研究科修士論文, 未公開.  
(YOSHII Norifumi, ONO Satoko, TERADA Shin-ichi)